

先進事例から学ぶ 「本の力」の生かし方



『本の力でまちづくり』
北海道恵庭市からの発信』
小磯修二 編著
(中西出版・1980円 税込)



渡部 晶 わたべ・あきら

1963年福島県平市（現・いわき市）生まれ。京都大学法学部卒。1987年大蔵省入省。財務省大臣官房地方課長、沖縄振興開発金融公庫副理事長、財務省財務総合政策研究所長などを歴任し、2024年7月退官。いわき応援大使、2024年3月放送大学大学院修士（学術）、日本政策投資銀行設備投資研究所上席主任研究員。

「本の力をまちづくりに」という考えは非常に重要な観点だ。私自身、山陰地方の今井書店による「本の学校」の創設に尽力した永井伸和氏や元鳥取県立図書館長の齋藤明彦氏との交流を通じ、財務省広報誌『ファイナンス』（2018年2月号）に「図書館・書店を拠点とした地域活性化への展望～日本における『サードプレイス』の可能性」を寄稿し、そのことを大いに強調した。

本書は地域政策プランナーとして活躍をつづける小磯修二氏が北海道文教大学地域創造研究センター長として、大学の所在地である北海道恵庭市の本にかかわるさまざまな取り組みを6人の共同執筆者とともに書き上げたものだ。

構成は「序『本のまち』から文化創造都市への挑戦（小磯、以下敬称略）」「Ⅰ 読書のまち恵庭の系譜と現状（内藤和代・黒氏優子・和合智子）」「Ⅱ 地域創造研究センターの活動（関口麻奈美）」「Ⅲ 本をめぐる環境の変化（廣瀬史帆）」「Ⅳ 文化創造都市の実践～視察調査から～（中嶋英人）」「Ⅴ 本の力でまちづくり（小磯）」となっている。

まずⅠでは、市役所の担当者による恵庭市の

読書政策の系譜が叙述される。1992年に図書館が開館するまでの市民参加の動き、2000年代初頭からの他部局である保健センターと連携した先進的なブックスタートの始動、学校司書を各学校に置くとともに図書館全体のネットワーク・運営を統一するなどの図書館行政の一元化の流れは^{どうもく}瞠目に値する。当時、先進地であった沖縄県の学校図書館視察が大きなキッカケになったという話もおもしろい。ちなみに、先進図書館として名高い鳥取県立図書館が都道府県立図書館で初の「学校図書館支援センター」を開設したのは2015年4月のことだ。

しかし、どのような先進的な取り組みもしいに熱気が薄れ、形式化していくものだ。そのため「創業守成」というように、いかに持続・継続していくかが大きな課題となる。そこで、恵庭市では市役所のみならず大学も含め、さまざまな関係者がそれに取り組んでおり、Ⅴではその様子が力強く語られている。本の力を活かすための仕組みとして、市民との共働、既存政策の横断的な再構築が必要という小磯氏の見解はまさにその通りだと思う。文化創造都市に向けた恵庭市の今後の取り組みに注目したい。